

第二期 第一〇二号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2024. 12. 10 定有堂書店 発行

読書に介入する

奈良 敏行

なぜ、拙著『宇沢弘文「社会を治す」』を書いたのか 岩田直樹

「本のある場所」日記 二〇二四年十一月 南陀楼綾繁

『ヘリヤ記』展

白井 明大

イシマル・サイトウ現象

萩原 俊郎

Get Yourself Together Pt.1&Pt.2

高木 善祥

本を作る側から (21)

村瀬 謙介

作家の本籍

古賀 啓三

民藝の話をしよう

山下 篤美

汽水のほとりから (44)

小原 修治

おあついのがお好き またまた

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その一〇〇

内田 克彦

内坪井町日記 (7)

齊藤 仁昭

病むことについて

三浦 永理

夏のいきものがかり

あきの素生

二〇案内

ドラマメリア

読書に介入する

奈良 敏行

(定有堂 主人)



小さな本屋は読者との距離が近い。「本屋の仕事」の一つとして、他人の読書に介入するという働きがここに生まれる。

臨床の言葉が読書の世界の中に浸透しつつある。身の回りを語る本の中に「ケア」とか「キュア」とかの言葉を頻繁に目にする。「ケア」はそっとしておく、「キュア」は解決へ導く。こういう次元での読書が始まっているようだ。

本屋の仕事にもこの両義性が存在する。他人が最近読んだ本の話題に耳を傾ける。とくにおすすめる本を持ち出すことなく、読者は自分が語る延長線上に次の読書のきっかけを見出す。ていねいに聞くといいことが大切だ。一方たくさん読んだけどなかなか解決策を見出せないという読者もいる。少し手を差し伸べ、その人が最近読んだ本で一つ別の次元でとりまとめているような本を提示し、解きほぐし解決へ導く。これは読書に介入することだと思う。

そもそも小さな本屋の小さな棚に思いを馳せれば、あれでなくこれを置くということ自体、「読書への介入」ではないだろうか。本屋に求められる大事な役割の一つだろう。目の前の読者が、いまなぜ本を求めているかの大きな理由を理解できれば、積極的におすすめすることもできる。しかしここで大事なものは、求められておすすめするので、「受け身の介入」でなければならないということだ。

大事なことは「引き出し」をたくさん持つということだ。対話しながらいま必要とされるはずの引き出しを開ける。ここにはきつと読書の喜びの入口がある。しかし対話の時間が熟しもしないのに、いきなり引き出しを開ければ、読者の反応は「いる・いない」の二択で終わってしまう。

介入しながら対話する。行きつ戻りつ。本屋が読者と対話するのは「いる・いない」の狭隘な選択をせまることではない。本屋は自分の引き出しをいっぱいにするために読者と対話する。一冊の本を入口にして読者の広く深い世界に分け入り、自分の引き出しを豊かにしていく。本屋の仕事の喜びと成長はここにある。そして所を変えて、他の読者にこの豊かな引き出しを開く。そんな引き出しを持っているのが本屋の条件だ。

本屋の仕事、他人のために本を並べる。並べた本を入口にして、本屋のための一冊を読者が自ずと教えてくれる。

本屋はそうした受け身の踏み込みの積み重ねで引き出しを豊かにする。そしていつかその「引き出し」を背負って本屋を離れる。「本や」になる。「笈(おい)」というものがあると聞く。芭蕉に『笈の小文』という書物があるが、その「笈」だ。背に負うように作られている木箱だ。見立てでそこには引き出しが納まっていると想像したい。行脚、修験者が背に負う引き出しだ。

「本や」は読者側の人間だが、笈を背中に負った姿を思い浮かべたい。なんでそんなことを考えるかという、ひと月前から近くの本屋さんの中に「棚貸し」という小店を設置させていたからだ。この縮減の有り様は「本屋」でなく「本や」だ。設置させてもらった本屋さんに対して、そして読者に対して二重に介入しようとしている。その見立てを楽しんでる。見立ては生き方に方向性を与えてくれる。本に癒やされて生きてきた人間は「本や」になる。これが見立てと方向性だ。

このひと月の間に、その棚で売れた本だ。『経済学は人びとを幸せにできるか』(宇沢弘文の著書で岩田直樹さんの講演が鼎立図書館である)『カフェをはじめの人の本』(本が好きな人はカフェが好き)『パツハ』(手にしてみたくなるクラシック本)『翔んで埼玉』(周縁という欲動にリスペクト)『これは水です』(三砂さんに教わった引き出し必携の本)『間違

う力』(現在入手できない優れ本)『すーちゃん』(脱力系のど真ん中)『知の整理術』(D&Aさんの本、生き方へと介入する)『生きがいについて』(いつか読みたいと思っていただけが急ぎの方へ)『日々是好日』(雨の日も風の日も幸せを見つけた!)
これが背負った「笈」の引き出しから今月「棚貸し」に並べ、人へとリレーした本だ。売上の顔ぶれがうれしかった。
いまも続く、「本や」の介入という話だ。

2024.11.04

- 宇沢弘文『経済学は人びとを幸福にできるか』東洋経済新報社 2013
『カフェをはじめの人の本』成美堂出版 2017
吉田秀和『バツハ 増補版』河出文庫 2023
魔夜峰史『翔んで埼玉アンソロジー』宝島社 2023
デヴィッド・フォスター・ウォレス『これは水です』田畑書店 2018
高野秀行『間違う力』角川新書 2018
益田ミリ『すーちゃん』幻冬舎文庫 2009
pha『知の整理術』大和文庫 2019
神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房 2004
森下典子『日々是好日』新潮文庫 2008

奈良敏行十三砂慶明

『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』

作品社 本体2200円

46判上製

ISBN978-4-86793-013-7

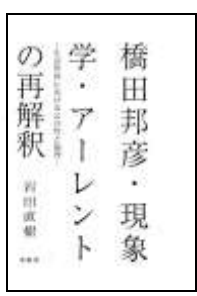
発行 2024.2

岩田直樹 著

『宇沢弘文「社会を治す」
社会的共通資本の再解釈』
二〇二四年七月二九日発売

岩田直樹 著

『橋田邦彦・現象学・アーレン
トの再解釈―生活世界における
公共性と倫理―』小取舎
2023 一八〇〇円



なぜ、拙著『宇沢弘文「社会を治す」』を書いたのか

岩田 直樹

(公立鳥取環境大学特任教授・「読む会」講師)

拙著『宇沢弘文「社会を治す」——社会的共通資本の再解釈』を七月二十九日に上梓してから約四ヶ月が経った。

前著『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈——生活世界における公共性と倫理』(二〇二三年二月七日刊)の続編である。二冊の刊行にあたって、奈良敏行さん、村瀬謙介さん(小取舎)には感謝の言葉が見つからない。内容をズバリと表現したタイトルは奈良さんの、凝った意匠のすてきな装丁は村瀬さんのお力添えの賜物である。

前著刊行から二ヶ月後の四月一日に定有堂書店が閉店。その二ヶ月後の六月二五日、安藤隆一さんのご尽力により、奈良さん、小林隆志、梶立図書館長(当時)と私がパネリストになり、フォーラム「定有堂書店『読む会』の展開——街の読書運動の可能性——」が開催された。私は「『読む会』がなければ拙著を書くことはなかった」と、「読む会」の共同の自己教育力について言及した。想定した第一の読者は「読む会」の参加者であった(『宇沢弘文』も同様)。

今回は内田克彦さんのご尽力により、前回と同じスケジュール感(刊行四ヶ月後)で、一月二四日に講演会「宇沢弘文の社会思想——社会的共通資本」から学ぶ」が開催されることになった。会場も同じ鳥取県立図書館大研修室である。

本稿を書いているのは、締め切り(毎月二五日)の関係で講演前。実際はどうなるかわからないが、「社会的共通資本」論を解説するのが目的の講演会で、「なぜ拙著を書いたのか」といった私の思いを長々と語るのとは筋違いである。この場を借りて「なぜ」に触れよう。

その前に、「橋田邦彦も宇沢弘文も鳥取県出身だから書いたのですか」というよく聞かれる質問から。答えは「たまたま」である。(橋田については定有堂ホームページ「今月読んだ本」第二二七回を参照。)

宇沢の本を初めて読んだのは『ケインズ「一般理論」を読む』(岩波セミナーブックス7、一九八四年)で、経歴には出身地が記されていない。その後読んだ岩波新書の奥付に「一九二八年鳥取県に生まれる」とあるから、そのとき同郷人であることを初めて知ったのだろう。

「ふーん、そうか」程度の反応だったはずだ。

『橋田邦彦』と『宇沢弘文』で試みたのが、それぞれ上向法、下向法(マルクス)である。これだけ書くと「な

んのこっちゃん」と思われるのは確実だろう。具体的には前著では、「生活世界（橋田、廣松渉、現象学）―公共性（アーレント、ハバーマス）―倫理（レヴィナス、ゼン）」の道を通った。当然ながら「次は下向法を」となる。しかし、そうは上手くいかない。二〇一〇年代は、公共性・倫理の上位概念、すなわち「最後のピース」「失われた環（ミッシング・リンク）」を探し続けていた。

「最後のピース」の候補に出会ったのは、思想や哲学とは別の文脈であった。高校在籍時（前職）に「SDGs教育」の具現化を探っていたとき、「そう言えば、社会的共通資本というのがあったな」と思い当たる。SDGsと社会的共通資本のつながりはあまり論じられていなかったが、この観点で宇沢の著作を再読してみた。宇沢思想を「再解釈」すれば、SDGsの理論的支柱になることに気づいたのが二〇二二年である。

さらに、今まであまり読んで来なかった宇沢の諸著作を読み進めていった。「社会的共通資本」論が「失われた環」であることを確信したのが二〇二三年の春、前著を刊行した直後であった。一〇年以上の探し物が見つかって、心の中でガッツポーズをした。

これから二年ほどかけて、いろいろと調べながらじっくりと書いていこう。しばらくして宇沢の没年が二〇一

四年であることを知った。「これはまずい」と焦る。没後一〇年に刊行すると没後一年では大違いだ。

じっくりと、などと悠長なことは言っていられない。先述の「読む会」フォーラムが終わるとすぐに、夏から秋にかけて関連文献を読み漁り（かつて読んだものも新しいものも）、拙著第一章「宇沢弘文の社会思想から「あいだ」の哲学へ」に着手したのが一月中旬。毎週二〇数枚ペース（四百字詰め原稿用紙換算）で書き続け、その都度「今月読んだ本」に掲載。最終の第一〇回を書き終えたのが一月末（最終アップは二月三〇日）であった。何度も何度も校正をして、五ヶ月で刊行に漕ぎつけた。なんとか没後一〇年（命日は九月一八日）に間に合った。通常業務と並行しての濃密な一年だった。

こうして、「社会的共通資本―公共性・倫理（丸山眞男、アーレント）―生活世界（メルロ・ポンティ、今村仁司、木村敏、廣松渉）」の下向法は完成した。もちろん、社会的共通資本については、例えば世代間倫理の深化（加藤尚武からアイリス・マリオン・ヤングへ）など、言及できなかった論点は多い。別の機会に譲ることしよう。

「本のある場所」日記 二〇二四年十一月

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

11月2日

直木賞研究家の川口則弘さんの車に同乗して町田へ。車内では川口さんの新刊『文芸記者がいた!』(本の雑誌社)の話。のちに作家や評論家になる有名記者を外し、いまでは忘れられた記者に光を当てる姿勢が好ましい。〈町田市立国際版画美術館〉で「両大戦間のモダニズム 1918-1939 煌めきと戸惑いの時代」展を見る。第一次世界大戦から第二次世界大戦までの約20年間、欧米と日本での版画作家の表現をたどるもの。オットー・テックスの強烈な『戦争』からはじまり、1920年代の光と影、モダニズムとシュルレアリスムを経て第二次大戦へと向かう。作者が時代に向けたアンテナが見えるような作品が多かった。

次に〈町田市民文学館 ことばらんど〉で「森村誠一展」。森村は50代に町田に居を構え、亡くなるまで暮らした。2009年に作家としての履歴に焦点を当てた展示をやっ

ているので、今回は作品を中心に構成したそうだ。作家デビュー前にビジネス書を書いていたことは知らなかった。展示に関するクイズ(難問あり)の正解者は森村の文庫本を一冊もらえる。森村は自著をかなりの冊数買い上げて関係者に配っていたそうで、この本は森村家が提供したものだという。中川右介さんの講演会「メディアミックス時代の夜明け」は、角川春樹が指揮した角川映画の時代をさまざまな視点から語るもの。私が中学から高校にかけての頃につくられた作品が多く、実際には観てなくても、角川書店の雑誌などいろんなエピソードを見聞きしているものばかりだ。

最後に、反町公園の中にある神奈川古書会館へ。大雨が降っており、終了まで残り30分ではほぼ無人。そんななか、じっくり棚を見て、結構いい本を数冊拾う。

11月15日

千駄木〈往来堂書店〉で、新刊『「本」とともに地域で生きる』(大正大学出版会)刊行記念トーク。ゲストはミュージシャンの品品(ピンポン)さん。最近、世田谷ピンポンズから改名した。雑誌『地域人』で各地の本屋、図書館、ローカルメディアを取材した記事が基になった本なので、本屋や文学館でライブをし、自身もZINEを出している

品品さんと話したかった。前置きなしに品品さんのライブから入り、写真を見せながら話すうちにあれもこれもと思いついて出てきて、たちまち時間が過ぎる。同書には「今井書店」グループの永井伸和さんのインタビュート、閉店した「定有堂書店」の記事も入っているので、鳥取の人にはぜひ読んでほしいです。

11月19日

神保町の皓星社で、12月に出る『書庫をあらく、アーカイブの隠れた魅力』の最終チェック。「日本の古本屋メーラムガジン」連載の図書館や文学館の書庫取材レポート。単行本にまとめるにあたって、その後の状況を追記したり、写真を増やしたりした。並行して連載も続いているので、この数か月はずっと書庫の中に入りびたっている気分だった。これで私の手から離れ、完成した本にするのを待つばかりに。この時間が一番楽しい。

11月21日

先週、文京区千石でオープンした「旅と暮らしの本屋 アーダンテ」へ。出版社の産業編集センターが直営する新刊書店。同社には何度も行っているが、一階のスペースがこんなに広いとは意外だった。そのなかで緩くテーマ別に配

列している。ひとくちに「旅」といっても、いろんな切り口があるものだ。レジではエプロンかけた出版部のみなさんが奮闘中。文京区関連のコーナーで、戦前この近くにあった「巣鴨撮影所」に関する本（『円谷英二と阪妻そして内田吐夢』西田書店）を買う。

その後、代田橋へ。駅前のラーメン屋で食べてから、隣の古本屋（BACK PACK BOOKS）を覗く。狭いがぐっとくる古本が並ぶ。隣はレコード店（OMIYAGE）。そのアパートの二階の座敷で、田口史人さんの「レコード寄席」を聴く。田口さんは高円寺で「円盤」というライブハウスを営みながらレコードや本をつくり続けている人。いまは彦根の元銭湯（山の湯）でレコードと古本の店を開いている。今回の「沖縄現地盤レコードの世界」は、沖縄で多くのレコードレーベルが生まれ、それが沖縄返還をにらんだ本土との関係の中でどう変容していったかを、さまざまな曲を掛けつつ話す。最後に四枚のレコードとともに語った言葉が心に刺さる。そのレコードが「誰に向かってつくられているか？」という問いは、表現に関わる者がつねに自分に問いかけるべきものだろう。

『へりや記』展

白井 明大

(詩人)

鳥取駅から県庁までつづく若狭街道のなかほど、鳥取市街をゆつくりと流れる袋川に架かった若桜橋のたもとにある「ベーグル喫茶 森の生活者」で、去る十一月六日から二十四日まで『へりや記』というファンタジーをテーマにした展覧会をぶじ開催することができた。会期を終えた翌朝のいま、ほっとした気持ちでこの文章を書いている。あつという間だったように思われつつも、ふり返ってみれば、いちどときには挙げきれないほど、どの一日にも豊かなできごとがあり、あたたかな思い出として残っていく予感が静かに胸に降りている。

「森の生活者」は、袋川沿いの道に面したガラスドアをくぐり、階段をのぼった二階にある。店内に足を踏みいれると、ベーグルのならんだショーケースに出迎えられ、左手を見れば、広々とした窓がまず目に入り、窓辺に据えられた細長いカウンター席や、その手前にテーブルと椅子の

配された喫茶コーナーがあるのがわかる。そして右手には店内からつながった、こぢんまりとした白い空間がふくらみ、言葉の展示をしたくなるギャラリースペースとなっている。

数段のステップを降り、ギャラリースペースに立った左側の壁面に、表紙を飾るカシワイさんの原画や地図、この物語のために辻祥江さんがデザインしてくれたタイトロゴ、物語の冒頭に置いたエピソードの自筆原稿を展示した。奥の壁には、「へりや記」序 詩篇」と題した連作詩のうち、七番と八番を手書きした紙片を掛けた。

もっとも広い右側の壁面には、物語の種となり、イメーシのもととなった六点の写真——弘前ねぶた・なぬかびおくりの日の岩木川の川辺、いわきの onito 邸室内に柿渋染めの服が掛かった窓辺、新袋川に降る天気雪、同じく河川敷の残雪と白い羽根、樗谿の散策路わきの杭にのった白い羽根、辺野古・瀬高の浜の貝——に、それぞれ言葉を添えて展示した。

さらに同じ右壁面の、細い柱をへだてた左隅のコーナーには、物語に登場するノルという植物を彷彿とさせる、ほっそりした茎がうねった先に小さな玉のような花を付けた草——芙植物室が育てて、森の生活者の許へ連れてきたグラスペディアという植物だとあとで教わった——を借り、一

輪の野花を壁に生けた。

残る手前の壁面には「詩篇」三番の手書き紙片を展示し、右隅にこれまで上梓した詩集、著書に短いコメントを付したブックリストを掛けて配布した。

店内にも展示物を配し、店の入口と北の広い窓に物語の一節を、東の窓辺にカシワイさんの挿絵の入った本文頁の藤原印刷による印刷一部抜き、これまでに拾った貝殻や小石、そして嘉瑞工房による「詩篇」七番の活版印刷ポストカードと、実際の印刷に使用した活字組版、當麻妙が撮影した嘉瑞工房の活版印刷機の写真を、そのほか店内の壁や柱に、物語のキーワードとなる言葉や、詩の手書き紙片をちりばめた。また店内・西側の壁には、辻祥江さんデザイン展の展覧会告知用ポスター（當麻妙の風景写真と物語のエピソード、タイトルロゴにより構成）が貼られており、在廊中にぼんやりと眺めては次巻のことをつらつらと考えていた。

先述のノルは、物語のなかで穀物として登場するのだけれど、「森の生活者」店主、森木陽子さんが、そのノルをイメージした鳥の形のクッキーを創作し、パッケージには森木さん手製の消しゴム判子でタイトルロゴまで捺されたものが会期中、ショーケースにならび、目にするたびに内心うれしさがこみあげた。

展覧会に併せて、若桜橋を渡ってすぐのSHEEPSH EEP BOOKSでは詩画集『いまきみがきみであること』を収録されたカシワイさんの原画とともに、自筆原稿を展示し、関連書籍をならべたコーナーを設けていた。展覧会用のBGMの選曲には、ボルゾイレコードの協力を得て、ヴァシユティ・バナヤン、ペンギン・カフェ・オーケストラなど物語のイメージに合った音楽と出会うことができた。

十日の午後に催したギャラリートークでは、定有堂主人、奈良敏行さんにご登壇を願った。『ヘリヤ記』について、拙詩に関して、奈良さんが語る言葉をすぐ隣りで聴きながら、ああ、これは一生の宝物になる、と脳裏に直感が訪れていた。伊民公恵さんが詩集『生きようと生きるほうへ』に収録した詩「生きる」を朗読する声もまたずっとこの先耳にありつづけるだろう。

在廊中は、きな粉あんバターサンドのベーグル、クロックムッシュなど、おいしいコーヒーとともに森木さん、田崎さんに作っていただいた。つくづく幸せな時間だった。またこの街で物語のつづきを書きたい。

イシマル・サイトウ現象

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

「アメリカの有権者は、よくあんな無茶苦茶なトランプに投票したな」などと呑気に言っていられない時代が日本にもやって来た。

◇ ◇ ◇

兵庫県知事選は、自身のパワハラ問題で県議会に不信任を突き付けられ、自動失職した齋藤元彦前知事が、予想をくつがえして圧勝した。いつの間にか彼を取り囲む「熱狂的な支持者」の多さに、戸惑いを覚えた人も多いだろう。

全政党にソップを向かれた齋藤の選挙活動はもっぱら街頭演説とSNSで、当選翌日のマスコミは「都知事選の石丸に続いてSNSが追い風」「在任中の実績が評価された」と、いつものごとく大雑把な総括。これでは何も分からな
い。もう少し詳しい分析がいる。

とくに、私もかつて籍を置いた新聞社(全国紙、地方紙)

やテレビ局など、いわゆる「既存のマスコミ」に対して今、人々が何を思い、どういう視線を注ぎ始めているか。

◇ ◇ ◇

もう一つ言えば、齋藤氏の「罪」とは何だったのか、という確認も必要だ。

マスコミ各社は当初、内部告発文書が届いていたのどこも相手にしなかった。ところが一転、横一線で報道合戦が始まると、「怒りにまかせて部下にものを投げつけた」「視察先で物品をおねだりした」。知事の行状が連日、TVのワイドショーで報道された。「瞬間湯沸かし器、独裁者さながらの驚くべき知事が兵庫にいるんです」と。

だが、即それで失職となる案件ではない。彼の「罪」は、兵庫県が定めた「公益通報者保護制度」に反し、その長である知事自身が激高して「犯人捜し」を部下に命じ、保護されるはずの内部通報者をいきなり処分したのではないかということ。それは優勝パレードでの補助金キックバック疑惑と共に、まだ十分解明されていない。

事実ならば知事にあつてはならない法令違反や背任罪に当たる。ところがマスコミは地道な「調査報道」より、手っ取り早く齋藤の人格やパワハラ内容に強い興味を示した。ワイドショーは文字通り「ショー」と化した。世論の大勢が「反齋藤」に傾いたとみると、県議会では齋藤を拒ぎ出

した自民や維新まで「不信任やむなし」に動いた。

実はこうしたマスコミ、さらに臆議||既存政党の政治家の動きこそ、のちの「齋藤の大どんでん返し当選」につながったように思う。

◇ ◇ ◇

「四面楚歌」となった齋藤だが、SNS上では「知事を辞めるほどの行為か」「人格攻撃のようなマスコミ報道は疑問」といった声はあつた。これが選挙期間中、一気に「発火」した。

その「着火剤」となったのは、SNS上で流された「知事は熱心だっただけ」「パワハラを見聞きしたという職員アンケートは、上から指示されたもの」「パワハラは通報者の捏造」といった擁護や捏造論、「改革を進める齋藤を排斥するため、通報者は当初から臆議らと内通していた」といった陰謀論や、なかには真偽が全く明らかでない女性関係など「プライベートの問題が明るみになるのを避けたくて、百条委の前に自殺した」といった通報者を貶める怪情報（実名も暴露）まであつた。

「われわれは齋藤知事を誤解していた」「改革を進めていた知事は集団でいじめられた」。SNSや口コミを通じて「マスコミが隠していた真実」にたどり着いた（と信じた）有権者は「義憤」にかられ、齋藤支持に転じた。

だが、さすがに齋藤陣営が捏造論や陰謀論のたぐいを流すわけにはいかない。代わりに援軍となったのは、「自分には投票しないで」と奇妙な立候補声明をしたN国党の立花党首をはじめ、ネットを多用し、公選法違反すれすれの活動で近年台頭してきた連中だ。事実、「立花さんのおかげで真実が分かった」「立花党首、ありがとう」といった書き込みが選挙中飛び交った。

「もうマスコミには騙されない」「石丸、齋藤こそ既得権勢力に挑む改革者」。こうした支持層の底流には、エスタブリッシュメント（既存の政治・経済・メディア）に対して、いくら働いても報われない、いくら訴えても届かない、と感じる大衆のルサンチマン（怒みつらみ）がある。それはトランプの「岩盤支持層」に酷似している。

◇ ◇ ◇

前号では「SNSが窮屈というか…厄介な存在に感じ始めた」という私の心情をたまたま書いた。

SNSは『アラブの春』のように抑圧的、権威主義的な国では権力に抗う「突破口」になる一方、先進諸国では世論や社会の分断によって勢力を伸ばそうとするポピュリズム政治家たちの安価で強力なツールになりうる。

このままでは米国のような分断社会はもうすぐ、という気がしてならない。

Get Yourself Together Pt1&Pt2

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

実は、本屋とは別の仕事を三つ？ 四つ？ やっている。

先日は倉吉まで赴き、ある方々にインタビューをしてきた。今のところ表に出す予定はないので詳細は書けないが、文化・歴史・政治・経済は全部つながっていることをひしひしと感じる、濃厚な二時間だった。地域の中で何かしらの活動をしていると、様々な問題にぶつかると。金銭的な問題を解決する方法が、その街の文化や歴史を知ることだった。りするのは、割とよくある。

公式見解を裏書きする話や、その横で紡がれるサイドストーリー。下調べをして人の話を聞く。問いかけて、さらに深堀する。それを記録として残す。今回の仕事で得たものは大きい。

社会学者の岸政彦が編んだ『東京の生活史』が思い浮かんだ。あらゆる時代の、あらゆる場所で、その地域の生活史が作られたらいいのに。

*

本を出しすぎて、そもそも何者なのか誰も気にしていない気がする斎藤孝は、「身体論の人」が私の認識だ。

二〇〇一年に出版されたちくま新書の『「できる人」はどこがちがうのか』という、ちよつと気恥しいタイトルの本を手にした理由は覚えていないが、ここで書かれた蓮實重彦のエピソードが印象的だった。

フランスの映画監督、ジャン＝リュック・ゴダールへのインタビューで、あからさまに退屈な態度を取られ、まともな返答がもらえず、ただ時間だけが過ぎていく。仕切り直しに一息入れるつもりで、

「最近の映画、上映時間が長すぎると思いませんか？」と問いかけると

「そうなんだよー最近の映画監督は〜〜」

とききなり饒舌に語り始め、インタビューは充実したもとのとなった。

事前準備とその場のライブ感。適切な問いを立てるスキルを身につけたい。あの蓮實重彦を困らせるゴダール恐ろしい…という感想とともに。

*

別の仕事の関係で、人前で話す場面が増えている。そもそも人前で話すのが苦手なのだが、そういう世界に自分から飛び込んだので、数をこなして慣らしていくしかない。オンライン上なので、実際に対面で行うのとは別の緊張感がある。パソコンのカメラを見つめ続けるのも難しい。淡々としすぎていたり、焦って早口でしゃべってしまった自分の後で、身振りも交えて笑顔で語り掛け、聴衆の心をつかむ人が出る。持って生まれた性格と努力でここまでできるんだろうな、と羨望の眼差し。プレゼン名手への道のりは険しい。

*

店をオープンして以降、取材を受けることが増えた。事前にしつかり準備をしている方ばかりで、その方の質問に答えることで、自分の考えがクリアになることも多い。先日の取材でも、あちこちに飛んだ私の話をきちんと筋立ててまとめてくれていた。

一方で、自分が語りたいストーリーに、パズルのピースのように当てはめたる人の取材は、過去に何度か経験した。

小説をたくさん読んで、物語の楽しさは身をもって知っ

ている。だからこそ、(本人に自覚はなくても) 物語の心地よさを利用したがる人は、常に警戒している。

【参考文献】

『約束の果て 黒と紫の国』高丘哲次 新潮文庫

日本ファンタジーノベル大賞受賞作。単行本の時に本屋大賞に一位で投票したが、私以外は投票しておらず愕然とした。圧倒的に映像喚起的なのに映像化できない、優れた物語。十回近く読んでいる。

『戦争広告代理店』高木徹 講談社文庫

演出された正義、誘導される国際世論。ボスニア紛争の勝敗を決したのはアメリカEY企業の「広報のプロ」たち。他人事ではない。

『調査されるといふ迷惑 増補版』宮本常一・安溪遊地 みずのわ出版

学術分野・ビジネス分野問わず、外から誰かと関わる時は、「構造的に」常に迷惑をかける側であることを自覚しておきたい。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から (21)

村瀬 謙介

(小取舎)

本を作る側からとタイトルをつけているが、本を作らない側のことをいつも考えている。いわゆる本を買ってくれる方のことで、さらには普及本を読まない人も購買予備軍として内包されるのだが、先日も「本を読めないんすよねえ」なんて言ってくれた知り合いがいた。「雑誌とかの写真を見て、気になった記事を読むくらい」だという。その方だけでなく、研究に本を活用しない学生や、大人でも情報のほとんどをインターネットから取っていて本はおろか新聞も読まない方は多い。実は私の妻も本を読まない人で、芥川賞を受賞した「推し、燃ゆ」を買っていた時には二度見したほど驚いた。「読むの？」と聞くと「読むものでしょ？」と返された。しかしその本以降、読んでいる姿をみていない。決して本を読まない人が不幸だという思いはない。故に強要もしない。なぜなら彼らは本を読まなくても幸せそうである。

最近の書店減少のニュースに伴って読書離れという言葉をよく聞くが、そもそも読書離れとは、読書していた人が読書をしなくなったということ、元々読まない人は書店減少の犯人ではない。読書離れなんかあり得るのかと思っただが、かつて映画少年だった私は、高校生までと卒業後の大阪での八年間ものすごい数の映画を観ていた。授業で映画を観てレポートを書く学校に通っていたし、梅田の「SUNYAやアパート」の近くのレンタルビデオ店にかなりの頻度で行っていた。そんな私も今は映画離れしている。一ヶ月に一本観るかどうか。環境で「離れ」も大いにありうる。

出版社としては元来読書が好きな人たちへの本作りだけでなく、「まったくわたくし本を読みません」という人も別アプローチをして本を買ってもらわないといけない。古くはCD付きの本や付録付きの本はその部類。野菜が一緒に届くという本もあったなあ。芥川賞や直木賞、本屋大賞などで話題作を作るのもまだまだ有効な手と言える。映画化ドラマ化なども原作本として売れる。普及本を読まない人に対してかなり敷居を下げる努力もしないとますます本を読む人が減少していく。

デジタルネイティブ世代が成人する二〇三〇年代には、今よりももっと本を手取るきつかけ作りが重要ではないかと思う。小取舎は鳥取の文化を後世に紙で伝えることを核としているゆえ、割と上の世代の方が著者で多いのだが、若者にとつて身近なテーマや形式での本作りも必要だと思っている。

そしてさらに上にもつと下の世代への本との関わり方も今から考えなければならぬ。村瀬家でも〇歳児に絵本をたくさん読んでいる。効果がわかるのはまだまだ先だが。

出版社が単なる「本を作る会社」にとどまらず、「本を通じて文化を育む企業」としての役割を果たすことが求められる。本の内容を後世に繋ぐのも大事だが、本の文化を次世代に繋げるためにもつと動かなくてはいけない。編集、校正、流通、経理も一人でやっているからなかなか手が回らないという言い訳をして書店さんに販売を任せている現状だが、ちよつとでも時間を作って本を作る側も書店を支援したい。ローカルなテーマの本を積極的に出版し、地方書店と協力して地域文化の価値を高めることができれば最高だな。

これが今年最後の音信不通になるのかな。今年もあつという間だったなあ。地方出版社と地方書店を文化の発信拠点として再定義することで、本と地域住民をつなぐ役割を果たせるのではないだろうか。二〇二五年もためになる本、誰かを助ける本、鳥取の歴史的価値がある本、さらにはバカみただけど面白い本、誰もが買いやすい本とか作れたらいいと思う。今後とも小取舎をよろしく願います。

小取舎の最新刊

『宇沢弘文「社会を治す」

社会的共通資本の再解釈』

岩田直樹 著

二〇二四年七月二九日発売



作家の本籍

古賀 啓三

(米国ミシガン州)

「地球にちりばめられて」を読み了えたが、心に残るものは何もなかった。それは安堵も混じった、負け惜しみのような、入り組んだ心理かもしれない。筆者多和田葉子が高い評価を受けている作家だということは聞き及んでいて、かなり構えて読んだからか。日本人が外国に住み、その国の言語に包囲されながら日本語で小説を書く、というニッチを確立した、そしてニッチと呼ぶには思いがけず広い対象の支持を得てしまった作家、であろうか。並列に自分のことを語るのは僭越だが、外国で暮らしつつ、日本語で小説を書く、というのが、心許ない、寄る辺のない、ある意味間抜けな（そんなに日本語にしがみつくんであれば、日本を捨てるな、という）行為であることは身に染みており、言語、国といったテーマは、始終身に纏わりついているので、今さら Resonate / 共鳴できなかつたのかもしれない。そして作品の文学性はテーマよりも、テーマを処理す

る技法にある。

と言ったのは残念ながら僕ではなく、バルガス・リョサ。技法、という点では、各章ごとに異なる話者・視点人物が配置され、章が進むに連れ、有機的につながってゆく、という仕掛けは楽しめたが、それを手際よく収束させることに腐心、というか、かまけ過ぎてるように感じた。その Economical なデリバリーに不充足感を感じてしまうのは、小説の表層的けれん、例えば語り口、などといったことに執心する自分（と小説の関係）の矮小性を露呈しているだけかもしれない。

この本は板野さんという、僕の書くものの Alpha Reader をお願いしている方の勧めで読んだ。アルファ・リーダーというのは書き了えたばかりで未推敲の作品を通して読んでもらい、感想や、疑問点（辻褄の合わない脈絡、事実関係の誤認、誤字脱字）等、指摘いただく（だけではなく、それではどう書き替えたなら良いのか、も含め、アドバイスしてもらおう）、という作家にとってはクリティカルな存在で、僕がプロの書き手であったら印税の20%くらい請求されても仕方ないんじゃないか、と思いつつもプロではないのでご好意に甘えている（笑）。以前は奈良さんが僕の作品の唯一の読者・評者であったのだが、自分はもう（おまえの）小説の評価などできない（したくない）ので、僕が

読み巧者として一日置いている板野さんという人に頼んでおいてやるから、今後は彼女に読んでもらえ、と引導を渡される。板野さんは定有堂の「読書室ビオトープ」の参加者で、奈良さんに一日置かれたのもここ。「地球にちりばめられて」も、この読書会での課題本であったらしい。今後書くこと、読んだもの、について語るとき、この人の絡むことが増えそうなので紹介しておく。

板野さんとは僕の作品だけではなく、文学一般についても教えてもらう、もとい、語り合うこともある。ボルヘスが好き、と仰るので、歳は多分僕の半分くらいでありながら（会ったことがないので実態はわからない）、いつも教わるばかりではなめられる、たまにはマウントを取らなければ、とラテンアメリカ文学の蘊蓄を垂れようとして、ボルヘス以外はマルケスクらいしか読んでないことに気づく。

「地球にちりばめられて」にヒルコという「Token Japanese」のキャラクターがある。トークンというのは「象徴」とでもいった意味で、PCを保つために使われる場合が多い。例えば、白人ばかりの役員会にばらばらっと混ぜられた黒人や女性など。僕が書く小説にも日本人が一人も出て来ない作品はない。アメリカ人女性と結婚していて帰化した大文学教授、強制収容所に収監されていた日系人女性、等々。多和田葉子の凄いところは独語でも創作する、とのことだ。

それが小説か否か不明だが、その場合もトークン日本人が登場するのだろうか？僕も時々日本人が一人も出て来ない小説ってのはどうだろう、と思うことがある。もしアメリカ人キャラクターのみの作品を書かなければならないとしたら、英語で書いた方が容易そうな気がする。その因果関係は暇な時に一回じっくり考えてみなければならぬ。英語での執筆をトライしたことはあるが直ぐに諦めた。それはやはり文章のけれん、語り口、といった点での勝手の悪さ、というのがありそうだ。海外からの日本書籍購入がめざましく便利になったアマゾン海外発送で、バルガス・リョサの「ケルト人の夢」、「楽園への道」をジャケ買いする（対アルファ・リーダー蘊蓄用）。おや、と思っただのは前者の主人公はアイルランド人、後者はフランス人。筆者リョサはペルー人である。舞台としても前者はコンゴとアイルランド、後者はフランスとバリ島が主だが、申し訳程度にペルーは登場する。トークンとしてのキャラクターの国籍ではなく、国そのものがトークンだったのである。リョサのことはまた書く。

民藝の話をしよう

山下 篤美

(魔女修行中)

では、引き続き「民藝」のお話を…

来年は柳宗悦氏が民衆的工藝、略して「民藝」という言葉を送り出してから、ちょうど百年。そんなこともあってなんでしょう。雑誌「&Premium」12月号で特集が組まれています。その中に鳥取大学主催の講座でお話しくださった「民藝」編集長、福岡で「工藝風向」というお店を経営していらっしやる高木崇雄氏のご自宅が紹介されています。素敵なお部屋の写真にうっとりするも、こういう形で、暮らしぶりを拝見するというのは、なんだか覗き見みたいで、いけないことをしているような気持ちになりませんね。高木氏には「わかりやすい民藝」というご著書があって、実はそれを読んでからこの原稿を書くかと思って、生意気にも「締め切り延長」を奈良さんをお願いしたのですが、結局読めず仕舞いになってしまいました。すみません。

それにしても、講義を受けたたり、本を読んだりして知識面で「民藝」を齧ってしまうと「この器、いいなあ。これに卵焼きを乗つけて食べたなら、間違いなく幸せだな」なんてお気楽に器と関わってきた私なんぞ、果たして民藝について何かを語っていいものかと思ってしまう。

しかし、柳氏が重んじた工人の無銘性。その無銘性って、なにも作り手だけに限らず使い手の側にもあるのではないのかとも思うわけです。いわゆる「用の美」は、庶民の暮らしを豊かにするものこそ、その美が宿るはずだと。それなら、民藝を暮らしの指針に据えて、魔女修行の道を進む私とて、民藝愛を綴ってもいいかなと思っただ次第。

さて、来年は民藝百年。と言いましたが、今手元には柳氏の「民藝四十年」(岩波文庫)という本があります。氏の民藝に対する思いを要約したような本なのですが、それが更に時を重ねて、百年ですからね。そして今尚、その世界に心惹かれる人々が多く存在するというのは、用の美は時空を越えて、価値あるもので、その美を求める庶民に広く支えられているという証なのではないでしょうか。

実は先日、鳥取市青谷町にある「かみじち史跡公園」へ研修に行きました。ご存知の方も多いでしょうが、鳥取は掘れば色々出てくるところで、特に青谷のかみじちは「史跡」と銘打たれているくらい、学術的にも価値が認められ

た場所なのだそうです。弥生人の脳みそが発見されるほど地下の状態がよかったのは、驚くべきこと。ここから多くの謎を紐解くことができるでしょう。

解説の方から、当時の人々の暮らしにまつわる興味深いお話も色々とお聞かせていただいたのですが、何より私の心に響いたのは、企画展の部屋に飾られていた「籠」に話が及んだ時。確かな技術に裏付けされた籠は、単に実用性を重んじただけでなく美しさも表現されていました。解説の方は「用の美」がそこにはあるとおっしゃったのです。その瞬間、私の目からは、文字通り鱗が落ちました。縄文土器に比べて、質素で芸術的にパツとしないと思いつ込んでいた弥生のも。しかしその時代には「用の美」があった。そして、大陸と交易できるくらいレベルの高い「ものづくり」の作り手が確かにここにいた。そのことに、民藝の心を受け継ぐ工人が、この鳥取に多いことにも不意に納得がきました。

柳氏が見つけ出した「民藝」の概念は、弥生時代には既に存在し、実は脈々と我々の心に受け継がれてきたものだったのではないか。ということは、それは、我々の時代、さらにその後にも延々と続いていくものなのかもしれません。もし、柳氏がこの史跡を見たら、一体何を感じたのでしょうか。

たとえ時代が移り変わろうとも、暮らしの中に美を求める心は、こんな遠い時代の人とも一瞬で繋がることができる。少し大袈裟ですが、民藝を通じて、人間の歴史の一点を自分も繋いで生きているような気持ちになって、心がじんわりと温かく感じられたのでした。

汽水のほとりから (44)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

先日、初めて岡山県の勝山にある真庭市立中央図書館を訪れた。イスラーム映画祭2024が開催されていたからで、誘われるまま友人の車に同乗し、最終日の午後15時に足を運び、映画を一本だけ見て、座談会に参加して帰ってきた。恐らくは市内在住のムスリムの人たちだろう、子供連れの夫婦たちが館内のブースで飲食や雑貨の販売をしていた。この図書館は六年前にリニューアルされたそうで、モダンな三階建てのビルで、至る所がガラス張りになっており、全体がイベントスペースになっている趣があった。なお、勝山までは県中部からは一時間余りで行くことができる。鳥取や米子の市街地へ行くのと変わらないほど実は近い。このような地方の公共図書館で映画祭があること自体とても驚きである。しかも、イスラーム映画祭だという。イスラーム教徒を抱える国は世界中で非常に多い。今回の

映画祭では計八作品の映画が上映されたが、シリア、モロッコ、アルジェリア、サウジアラビア、タジキスタン、ジョージア、バングラデシュと、全て違う国の映画である。今世紀に制作された新しい作品がほとんどだが、いずれもめったにお目にかかれないものが多く、全て鑑賞に値するが、今回観ることが出来たのは、五年前にバングラデシュがドイツと共同制作したモストファ・サルワル・ファルキ監督の『土曜の午後に』だった。刺激が強過ぎて地元では上映禁止になったといわれる、いわくつきの作品である。

この映画は、2016年にバングラデシュの首都ダッカで起きたレストラン襲撃人質テロ事件を映像化した作品である。冒頭から血なまぐさい殺人シーンの連続であり、場面がレストラン内だけに終始するのもきることながら、ワンカット撮影の緊張感溢れる画面に目が釘付けになり、約一時間半の上映時間があつという間に感じられるほど濃密な内容だった。実際の事件は、日本人の2名職員が7名も殺されており、それらしき東洋人も出てくるので、遺族の人たちにとっては到底見るに耐えない映画だろう。

しかし、上映直後の座談会でも話をさせてもらったが、これは断じてテロリストを糾弾する趣旨の映画ではない。その逆である。なぜならば、映画のワンシーンにおいて、テロリストが人質に執拗に問答を繰り返すのは事件後に彼

らにここで起きたことを伝えてほしいからだ」と述べるように、この映画は全編を通じて、テロリストのセリフに現われた彼らの思想信条にスポットを当てているからだ。つまり、これは観る者に対してテロリストを生むに至ったパングラデシユの悲劇的な社会背景について考えさせる映画なのだ。テロで殺された人だけでなく、テロリストもまたこの社会の犠牲者なのだ」と監督は言いたいのである。

座談会に参加した人は、おおむね年配の方が多かったが、私たちも含めて、地元の人はいなかったようである。その参加者の中で、現行のイスラエルとパレスチナの戦争のように、テロもまた宗教上の対立が引き起こすものだろうと発言された方があったが、それはむしろ伝統的な宗教を尊ぶ前近代と近代との対立、もう少し踏み込んで言えば、「反資本主義の社会と資本主義社会との対立だ」と考えた方が良いと思う。後でこの映画祭を主宰した図書館の職員に聞いた話だが、テロリストの多くは高学歴の人のようだ。

こうした対立のあり方を日本の歴史において考えれば、幕末の尊王攘夷の志士たちが類似するのではなからうか。とはいえ、尊王攘夷の志士たちが文字通り命懸けで作った明治の世は、王政復古という前近代の名を借りた近代化であり、資本主義社会化だったと言える。昭和維新のように、改めて尊王攘夷の思想が甦る所以がここにある。しかも、

評論家の加藤典洋がどこかに書いていたように、尊王攘夷は日本人にとって唯一自前の思想なのかもしれないのだ。

ともあれ、ムスリムの社会が資本主義に対立することは、映画の中のテロリストのセリフにも現われているが、実はイスラーム教そのものに理由がある。イスラーム金融がそれであり、「シャリア」というイスラーム法の教義においては、金融機関は利息を対価として仲介する経済活動をしてはならないとされている。イスラーム金融はそれを今も守ろうとしているのだ。融資した金銭によって利益が出た時のみ、それに応じてバックするような仕組みだが、そもそも無利子で資金を貸し出す金融機関が原形にある。日本でも信用金庫は、協同組合運動に由来する相互扶助的な金融機関が原形にあるとされ、こうした金融機関は本来資本主義社会とは相いれない面を持つと言えるのである。

座談会には真庭市在住のムスリムの若い夫婦(奥さんは日本人)が参加されていた。マレーシア出身だということでは故国のイスラーム金融について尋ねられると、彼の国ではグローバルな資本主義の銀行と併存しているとのこと、どちらを利用するかはその人次第であるとのことだった。

おあついのがお好き またまた

或いは、ブロック本のすすめ

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

今年、目にしたお厚い本二冊。

先ず、前田恭二の『文画双絶 崎人水島爾保布の生涯』(白水社)。幅広の帯も含めて、ブルー一色の装丁も委曲を尽くして好ましいが、何よりも厚さである。七九九ページ。判型もB6判と、嬉しいサイズ。お値段一万四千元は、ちと辛いが、日本画家、挿絵画家、漫画家、文筆家と、八面六臂の活躍をした稀有の人物であるにも拘わらず、まとまった画集も評伝(書誌は自費出版で一冊ある)もなかった所へ満を持しての登場である。惜しむらくは、図版が少ない・小さい。巻頭か巻末に、十六ページくらい図版ページを設けても良かったのではないかと思う。(ただ、そうすると、価格がもう二千円ほど高くなるかも)

今一冊は、高遠浩美の『楽しみと日々 壺中天書架記』

(法政大学出版局)で、B6判、八六七ページ、七千円。題名から分かるとおり、ブルーストに惚れ込んだ仏文学者の初のエッセー集。滋味豊かなエッセー群は、久しぶりに読むことの愉しさを満喫させてくれた。目下、『失われた時を求めて』の五番目の完訳を目指していて、第三篇まで刊行済みだが、既に六年が経過。御年七十四歳。ライフワークとして完遂を願うばかりである。

巷には、「煉瓦本」の、「鈍器本」の、という言い回しがあるらしい。某ミステリ作家の新書本あたりが始まりのようである。

かつては、凶器になりそうな本として、『広辞苑』机上版というのが不動の地位にあったが、つらつらと昔を振り返って、もう一つ思い出した。

埴谷雄高の『ドストエフスキイ全論集』(講談社、一九七九年)である。(二年後に、『死霊』の第六章が久々に刊行されている)A5判、一三五二ページという大冊に加えて、かっちりとした貼箱入り、本冊は布装の角背本。この厚さで角背とは、聊か常識を疑う造本だが、本文用紙が薄く柔軟で、背に無理なく開く。机上に広げたまま読める本、というのは貴重だ。角背は著者の好みなのかも知れない。

い。『死霊』も『作品集』も角背、箱入りだ。

とまれ、角背であったため、箱に収まると、恰も一個のブロックのようになる。玩具のブロックではなく、コンクリートブロックである。

こんなものが、書架の上段から転げ落ちてきたら、頭蓋骨陥没は免れまい。身の安全のためにも、書架の安定のためにも、大型本と極厚本は、最下段に配架することをお奨めしたい。

『完本夢野久作全集』第八巻や『日影丈吉全集』別巻もまた、うっとりするような厚さ加減である。

窓も扉も施錠された書齋の一角に、頭から血を流して絶命している男。傍らには血塗れの『夢野久作全集』。床には血文字で「Q」のダイニング・メッセージ。おお、『Qの悲劇』!……或いは、「頭の中でピチンと何か割れた音イヒヒヒヒヒ……と……俺が笑ふ声」と書かれた紙片が……

うーむ、ミステリの書き出しとしては上々ではないか。

かつては、「弁当箱のような」という形容があった。アルマイト製の大振りで、底の深い弁当箱があり、通称「ドカベン」とも言った。それに見立てて、分厚い本を、そう呼ぶようになったものらしい。(今は、弁当箱も上品にな

り、形状も様々で、この言葉も通じなくなっている)

一方、文庫本でも、厚冊、高額本が増えている。千ページ超も珍しくないし、三千円台も当たり前になりつつある。先日出たばかりの中上健次『異族』講談社文芸文庫版は三千五百円であった。

学術文庫では、七年前に『七十人訳ギリシア語聖書 モーセ五書』が一一九六ページ、三一五〇円で出ている。税込みでは、二〇一八年頃から三千円台が目立ち始める。

安岡章太郎『僕の昭和史』(文芸文庫)、片桐洋一『古今和歌集全評釈(上・中・下)』(学術文庫)などだ。

重版時に超えるものもあり、池田知久『莊子 全訳注(上)』は、二〇一四年の初刊時、二千円だったのが、現在は三千円に上がっている。

新潮社版単行本『失われた時を求めて』揃(筆者が学生時代から恋焦がれ、初ポーンナスでやっと買った、思い出のが三千円で購入してしまう古書市場を考えると、うたた今昔の感を久しゅうするばかりである)。

鳥取あれこれ その二〇〇

内田克彦（地域研究家）

「近藤久子」は地元によくの業績を残しているにもかかわらず、『とつとりの女性史』の中では各団体の長として記述されているだけであり、『とつとりの女性史聞き書き集』の「鳥取県連合婦人会の活動」の中ではエピソード的に語られているだけである。きつちりとした評伝が必要であると、以前、関係者に働きかけてみたが進まなかった。その時に教えてもらったのが、一九九六年刊の一番ヶ瀬康子『凜として咲く華』中の「山野に咲く―近藤久子さん」と、一九九七年刊の『成瀬記念館 No.13』の中の「聞きがき いのち・環境を守って 鳥取県連合婦人会50年のあゆみとともに」であった。

また、一九九五年一月刊の『地平線第9号』には、土井淑平「自由な精神と品位ある生き方―近藤久子著『暮らしの視点』に寄せて」が載る。一九九六年八月一五日刊の『くらしの視点―いのち・環境を守って―』は、『鳥取県婦人新聞』（鳥取県連合婦人会の機関紙、月四回、日曜日発行）の第一日曜に連載したこ

ラムをまとめたもので「待望久しい郷土出版物がやっと世に出た」と冒頭に書く土井による次の記述がある

まず感じたのは、明治末年生まれの近藤さんが、二次の大戦と戦後の激動を含む明治・大正・昭和・平成と変転する世相を生き抜いてきただけでなく、日本の近代史における女性運動の傑出した継承者の一人ではないか、ということである。

その後、二〇二二年に春日雅司・竹安栄子『地域社会と女性リーダー 鳥取県を中心に』が刊行され、その「第三章 女性の政治参加運動の展開と限界―戦後期鳥取県地域婦人会活動を中心に―」の中で、取り上げられた。初出論文は一九九二年刊『追手門学院大文学部紀要26号』所収の竹安栄子「ある婦人会活動家の軌跡―根雨地区婦人会活動を中心に―」であるが、残念ながら「I・思想形成の背景」が削除されている。

近藤久子は、一九一一（明治四四）年、日野郡根雨町に生まれる。米子高等女学校を卒業後、一九二七（昭和二）年四月に日本女子大学校本科家政学部に入學、一カ月後に高等学部理科に転科、三年修業後、大学本

科理学科化学部に入り、その一回生として一九三三(昭和八)年三月に卒業した。香雪化学館で助手として研究を続けながら附属高等女学校で化学・数学を教えた。

『凜として咲く華』に次の記述がある。

近藤さんの結婚については、今まで書かれたものには、ほとんど記されていない。戦時中の結婚であった。相手の方は、同志社大学出身のジャーナリストで、結核のため結婚後一年足らずで亡くなられたとのこと。近藤さんからは、一言しか語られていない。しかし、想いのこもった一言であった。

「夫も国民服はいつさい着なかつた人よ」

続けて、「その後、近藤さんも結核を病んで」と記述するが、根雨の実家に帰ったのは一九四九(昭和二四)年三月であった。五二年に根雨町婦人会長に就任、五七年に県連合婦人会副会長、五四年には同会長に就任したが、五五年に会長は別人となり、副会長に。その経緯を一九九四年刊の『白熱対談 どうする！わが「鳥取県」!!』の中で、次のように語っている。

後で聞くと県会自民党の方たちが「近藤では婦人会が革新になる」ということで県会議員さんが手分けして、別の方を出すように運動したんだそうです。それが総会時にばれて会員たちが怒ってしまった。

五六年から再び会長に就任。『白熱対談』では、「忘れ難い思い出」として、次の項目を語っている。

根雨地区で集団赤痢が発生したとき、発生状況から水道に関係があるとみて、原因究明にのりだし、滅菌装置の故障をつきとめたこと(昭和四二年)、水銀農薬使用禁止と回収を県に要望したこと(昭和四五年)、合成洗剤をやめ、石けんを使う運動(昭和五七年)、出雲街道に沿った根雨の古い町並のなかに、駐車場を設ける計画が伝えられた時、街並保存を町に申し入れ、阻止したこと(昭和五三年)、日野川沿いに製薬工場進出の計画を阻止したこと(昭和五三年「ママ」)、中海淡水化阻止に成功したこと(昭和五六年「ママ」)

近藤久子の思想と行動はもっと学ばれるべきだと考える。

内坪井町日記

(7)

齊藤仁昭(ケバブジョンソン)

元長崎書店勤務)

十月某日

つくばにてライブ。猿田なつなさんという画家の方が昔からのご縁にて企画してくれた。イベントタイトルは『旧石器時代』。なんだか集まろうぜ、って感じのするいいタイトル。DJは浦和で世話になっている廣岡くん、フレイヤーのデザインもしていたタクトくん。共演はポットマン。ピープルブックストアが出店。

つくばには初めて行った。羽田から秋葉原に向かい、つくばエクスプレスにて到着。筑波大学があつて、学園都市で、新しい町で、若者が大勢いて、とか勝手に思っていたが、思いのほか、閑散としている…？そしてなんだかだだっ広い。

まずその名がずっと気になっていたピープルブックストアに伺おうと思いがググルマップを開いたが、徒歩だと四十分と出てきた。駅近くだと勝手に思っていたが、バスで

ないと行けないみたい。バスを探して乗り込む。バス内で猿田さんとメールのやりとりをして、ピープルの隣にある千年一日珈琲という喫茶店を教えてください。ここのご店主がポットマンさんらしい。コーヒー屋さんだからポットマンなのかな。いい名前だ。

えらく広大な筑波大の脇の道を北上しバスを降り、まずは喫茶店に入る。とてもいい空気の流れる店だった。ケーセットをいただく。絵の展示中で、その絵もよかったが、作者の名前を失念。

ひといきついでいぎ隣のピープルブックストアへ。店内を物色し、スタジオボイスの古いやつと小林信彦の『四重奏カルテット』(幻戯書房)、コンピューマの新作CDを購入(中古や新品のレコードやCDも販売している)。店主に声をかけ、よもやま話。素敵な方だった。本屋っていいなあ。

リハールのためライブ会場 aNTENNAに向かう。これもまた町が結構ガラが悪くて予想外。飲み屋街の中に会場があった。会場も面白くて、美容師をされている方が趣味で作り上げたというライブハウスらしい。「自分あんまり機材とかかわしくないですよ」とかおっしゃっていたが、完全に謙遜で、とてもよい音環境だった。ただ、回線とマイクの数少なめで、今回はPAさんと呼んでおらず、

皆でいろいろいじりながらやってみようと話していたので試しながらリハーサル。手間取ったがなかなかよい仕上がりに。

会場には猿田さんの絵が飾ってあってそれが素晴らしかった。つくばでお客さんきてくれるのか不安だったが、大勢きてくれた。ありがたやく。ほんといちばんお客さんが少ないのが東京ってのはなんとかしないといかん。ポットマンさんの演奏もとてもよかった。ケバブはたつぷり十五曲。アンコールを二回もいただく。また来たいぜつくば。会場にて少し飲んで解散。

僕は安旅館へ。橋本君は車中泊。杉浦君と佐藤君は終電で帰宅。

十月某日

翌朝、橋本君に拾ってもらい東京へ向かう。首都高に乗ったのだけど、複雑すぎて道を間違えた。今日は吉祥寺にてライブ。三沢さんのライブがとてもよかった。例によってケバブが客を呼べておらず、主催の方にはたいへん申し訳なかった。夏葉社の島田さんが観にきてくださった。よい感想をいただきありがたかった。打ち上げでいった居酒屋が十周年で、鰯の刺身が十円だったことが印象に残っている。さすがにライブし過ぎて大赤字。借金がたいへん。ペー

スを落とさないといけない。

十一月某日

七五三の出張販売で神社へ。設営していたらなんだか腰が痛い。悪い予感。時間に連れてどんどん痛くなっていく。後半はもう立っていられないくらいだった。帰り道に痛み止めと塗る湿布薬を買ってしのぐ。家まで五十キロメートルが遠すぎる。冷や汗だか脂汗だかわからない汗かきながら帰宅。車から降りたらもう背筋をまつすぐに伸ばせない。妻に軽くマッサージしてもらい、寝る。寝返りもできない。

十一月某日

翌日、やや軽くなったかなと思ったので休まずに再び神社まで向かったが、到着してすぐ激痛。仕事の相方に任せ帰らせてもらう。日曜日のため整骨院もやっておらず、月曜に予約をして、ひたすらじっとしてしのぐ。

病むことについて

三浦 永理

(青翔開智中高教員)

潰瘍性大腸炎を発症してから二年経った。

難病指定されている病気になり、軽症の範囲内で治療ができず、高額な医療費がかかる身となった私は、医療費の補助を受けている。特定の病気に対して医療費を補助するこの日本の制度は稀らしい。ありがたい。一度は、一回の通院で十割負担が七十万円を超えるようなこともあったが、私の場合この病気の治療については月の限度額二万円が決まっている。この制度のお世話になっている身からすると、低福祉社会には移れない。

と、こんな制度の話をしてもつまらないだろう。多くの人には関係ないことだから。だから、私は人に病気の話をしすぎないようにしている。

ヴァージニア・ウルフの『病むことについて』には、こうある。

「病気が、愛や戦いや嫉妬とともに、文学の主要テーマの一つにならないのは、たしかに奇妙なことと思われる。(略)文学は、精神が関心事である、と懸命に主張するのだ。肉体は、魂がはつきりと見通すための無地ガラスであり、願望や貪欲など一つ二つの情熱をのぞいては、無価値で、取るに足らず、実在しないものだ、と。それどころか、まさにその反対が真実である。」

孤軍奮闘では、物語にはならない。それでも、体が精神を凌駕するようなことを当たり前のものとして受け止められるのが、病気を持った状態だ。

とはいっても、今の私は無理せず、普通に過ごしている。ただ通院の日は、病人であることを思い出す日でもある。今の薬は点滴薬で、最低でも八週間毎の通院が必要だ。まず診察の一時間以上前に病院へ行く。血液検査をする。待つ。眠くなる。毎回かわる四桁の番号札で名前が呼ばれたり呼ばれなかったりする。ひとり来ていたので、トイレにもなんとなく急いで行く。そうしている間に、看護師が番号を呼ぶ。「〇〇番の方。〇〇番の方。」と二回呼んでも返事がない。「ヤマネ様ー。」と呼んでも見つからない。日常茶飯事。それなりに若い私ですら、「今日は何番だっけ?」となるので、通院の多い高齢者世代には厳し

い関門のように思う。ただ、病院には家族で行くものだ。ご夫婦、親子、姪と叔母。若い方が呼びかけに気づく。となると、鳥取で身寄りのない私って肩身が狭いと思う。そんな風にならうとしながら本を読み進めていると、自分の番号がモニターに表示され、診察室の前で待つように言われる。あとは自分の番号が呼ばれるのを聞き逃さないだけだ。

そして、診察後は点滴を待つ。いぎ点滴を打つのに一時間ほどかかる。点滴の後も、とつても眠いなど思いながら、会計を待つ。終わった瞬間に職場に車を走らせて、何事もなかったように仕事をやる。というのが通院の日の日常だ。

病気になる前から、友達に相談することが減った。

私の最大の懸案事項が、「自分に合う薬は見つかるのか」
Ⅱ「将来の生活は大丈夫か」になってしまった。逆に、家族とお金の相談や体の調子の話がしやすい。家族は偉大なり。「私が死ぬときに一緒にその病気も、持ってってあげたい」と母親に言われるとき、離れていても家族と思う。

それでも、自分の体のことを大切にできるのは自分だけだ。面倒でも通院をやめることはできない。ちよつとツボを買わされる人の気持ちがあわかってきた。気をつけたい。

一方で、自分が新しい家族を作れるかというところ完全に自信を喪失した。病気持ちの私と家族に今からなる登場人物はいなそうだから。同じ病気の人で、発症後に婚約を解消された体験談を見た。「病気が遺伝するかもしれないから」と言われたらしいが、確かに潰瘍性大腸炎は原因不明なので、そうなるかもしれないし、そうでないかもしれない。病人であることのステイグマにどこまで抗えるだろうか。

でも、潰瘍性大腸炎患者として以外の人生があつてよかった。病気Ⅱ私ではない人生の場所がまだ残されている。私の病気のことを知らない知り合いもいるし、病院以外では日常を取り戻した。まるで普通、いや私は病気とのそれなりの付き合い方を学んでいるのだと思う。そうやって、病気との向き合い方を学んで、私の二十代が終わろうとしている。想像の斜め上だ。

年の瀬のどきどきにまぎれてとりとめのないことを書いてしまおう。ただそれだけの記事です。今年もありがとうございました。来年も生きていきましょう。

夏のいきものがかり

あきの素生

(くうねるめがね)



「いもくり(なんきん)」
今年は栗ご飯を炊いた。

母から先日栗ご飯を炊いたと聞き、食べたいなあ、でも、栗むくの大変なんだよなあ、と思っっているところに、スーパーに立派な栗が売ってあって、食欲が面倒くささに勝った。

勝つには勝ったが、かかる手間は変わらない。栗むき器を買おうかと、商品を比較検討してランキング形式で紹介しているウェブサイトをいくつか見て、自分なりの購入候補を決めたりもした。でも使う機会が圧倒的に少なそうだし、と逡巡し、あのお店の調理道具売り場に置いていたら買おうと、自分で決めることを放棄した。結果、栗むき器を見つけることができず、手持ちのペティナイフで栗に對峙することになった。

そう何度も栗むきを経験したことがあるわけではないが、とにかく大変だったことだけ記憶に残っている。何か裏技

的なものがないかと調べたところ、一度凍らせるとよいという情報を得た。となると、すぐには調理できない。とりあえず栗を凍らせ、栗むきができそうな、次なるタイミングを待った。

そのタイミングがやってきたので、栗を冷凍庫から取り出し、熱湯に浸けた。これも裏技の工程のひとつだ。熱くなった栗を箸でつまみ上げ、おそろおそろ左手に持つ。右手にペティナイフを握りしめ、少しずつ鬼皮をむいていく。お湯で温めているので鬼皮がやわらかい。むき進めていくと、やわらかかった鬼皮が少しずつ固くなるので、お湯に浸け浸け、むいていく。

鬼皮をむき終え、いよいよ渋皮に取りかかる段になると、親指の付け根がすでに痛くなっている。渋皮は、思い切りさえあれば、簡単にむけるのかもしれない。身を捨てる思いきりさえあれば。だが、年に一度食べるかどうかの栗ご飯、栗の数がそんなにあるわけだし、できる限り身を残し、できる限り多くの栗を食べたい。といった理由で、渋皮もお湯に浸け浸けちびちびむく。たまに、指でつまんだ渋皮が、つるつると簡単にむけたりすると、裏技の効果に満悦し、すわもうひとむき、と欲を出したりするのだが、同じ栗でも他の箇所の渋皮は強固に張りついていたりして、

渋皮むきは難航した。

手作りのマロングラッセや渋皮煮をいただくことがある。もちろん、とてもとてもおいしい。渋皮をむくことも、傷つけないことも、どちらも大変な手間がかかる。自分の無惨な渋皮むきに、改めていただきものの尊さを認識した。そんなわけで、栗のスイーツは作ったことがない。家で作る秋のスイーツはもっぱら芋だった。ふかした芋をごく粗くマッシュし、溶かしバターや砂糖、牛乳を入れて混ぜ、バターを塗った深めの耐熱容器に押し込んで、表面に卵黄を塗ってトースターで焼くという横着スイーツポテトだ。今でいう「スコップケーキ」のようなものか。丁寧に裏こしされたなめらかなスイーツポテトにはうっとりするが、ごろごろの食感もまた乙なものだ。

話がそれた。

渋皮をむき終わったら、すでに「今すぐ米を炊き始めなければ今夜の夕食に栗ご飯を食べることができない」という時間だった。幸い米は研いでいて、水に浸していたので、栗と調味料さえ入れればすぐに炊飯器のスイッチを押すことができる。と、ここで、調味料の分量を調べていなかったことに気がついた。改めて調べてみると、当たり前だが

さまざまな味付けがあり、どれが自分好みなのか見当もつかない。結局豆ご飯とほぼ同じ味付け（昆布だし、塩、酒）で、迷った割にさくつと炊いた。

炊き上がった栗ご飯は、控えめに黄色く色づいた栗が真ん中に集まり、ご飯がまわりを取り巻いてつやつやしていた。栗をあまり崩さないように気をつけながら、でも、すみずみまで栗が行き渡るようにご飯を混ぜた。つまみ食いは我慢して。

お茶碗に栗ご飯をよそい、食卓に並べる。栗が栗ご飯になるまでに数日かかった。待ちに待ったそのひとくちは、手間暇かかっても作ってよかったと思えるものだった。シンプルな味付けにしたので、栗の味がよくわかった。怪我の功名。食べ終わるのが惜しくて、ほくほくとした栗とうすら塩味のあるご飯を、時間をかけて口に運んだ。

近いうちにまた食べたいと思うが、また作りたいと思えるかは微妙なところだ。終わりゆく秋はあまりにも短い

㊦案内



ドラメリア (座敷わらし)

◇ 定有堂教室「読む会」(講師 岩田直樹氏)

12月17日 火曜日 19時から

テキスト 岩田直樹『宇沢弘文「社会を治す」社会的共通資本の再解釈』小取舎

会場 とりぎん文化会館 第6会議室

◇ 定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

12月5日 木曜日 19時から

テキスト 浅田彰『構造と力』中公文庫(前回続き)
会場 とりぎん文化会館

◇ 定有堂教室「読書室ジオトープ」

12月10日 火曜日 19時から

テキスト 吉田 篤弘『パロール・ジュレと魔法の冒険』

角川文庫

会場 とりぎん文化会館

◇ 太極拳教室(葉香クラブ)会場 二カ所

毎週 水曜 19時半から 市役所 麒麟スクエア

・土曜 13時半から 市役所 麒麟スクエア

講師 日本武術太極拳連盟 四段公認A級指導員(奈良)

二段 公認B級指導員(みちる教練)

・編集後記:

晴れの国へ来ています。コロナ前の訪問からかれこれ六年振り(ぐらいかな?)。やっぱり都会だよなあ……と人で溢れている駅ビルのお土産売場をうろうろ。選択肢が多いと目移りしてしまふ。

ねんりんは終わったものの、今月は祭り進行。なぜすべてがこの週なのか!と震えながら飛び乗った特急スーパーいなばで、座席の回転を久々に体験(上郡駅でのスイッチバック)。これがないと寝ていられるんだけどなあ。記念号の紙折しも道半ば、頑張ります。大丈夫、納品まではまだまだあるんだ。

ドラメリア(編集長)

「書くことがゴールなので……」。仕事をして考えて「音信不通」に寄稿する。ある人がそのように便りにお書きくださってます。心を引き締めて二〇一号が開始します。奈良敏行(発行人)